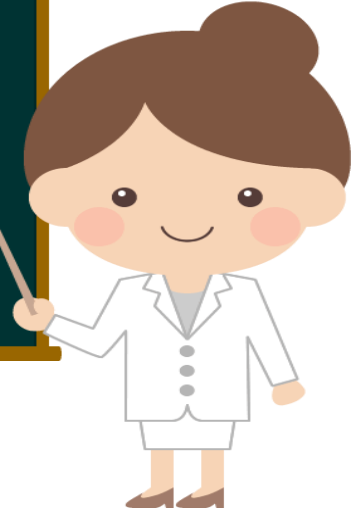


今回は

マイコプラズマ肺炎 のお話です。



このところ話題になっている

“マイコプラズマ”

ですが、マイコプラズマとは細菌の一種です。

マイコプラズマ肺炎とは、この細菌に感染することによって引き起こされる肺炎です。

マイコプラズマ肺炎にかかるのは、比較的若い世代や子どもたちとされていて、約 8 割は 14 歳以下であるとされています。

そして、マイコプラズマ肺炎は高熱以外の重篤な症状は現れにくく、発症したとしても全身の状態はそこまで悪くなることは少ないとされてきていました。

しかしこのところ、今までかからないであろうとされていた若年層より上の世代の大人達にも、このマイコプラズマ肺炎にかかっているという相談やニュースがあります。

元々重症化することが少ないのですが、中には呼吸不全を伴うような細気管支炎を引き起こしたり、入院治療が必要になったり、髄膜炎などの合併症を

引き起こす場合もあります。

マイコプラズマは、**飛沫感染**と**接触感染**によって感染者から周囲の人に感染するとされています。

人のくしゃみ、鼻水、咳などから細菌が移ってしまうわけです。



症状としては、マイコプラズマに感染して**2～3 週間の潜伏期間を経た後に、発熱、だるさ、頭痛など一般的な“風邪症状”が現れるのが特徴**となっています。

このため、最初は風邪と思って、**自己判断したり**、自宅療養してしまい、その間にも感染が増えてしまうということになります。

肺炎の特徴的な症状である咳などの呼吸器症状は、**自覚症状が出てから約3～5日ほど経ってから**現れるようです。

また、**発熱などの全身症状は通常数日で改善**しますが、**咳のみが1か月ほどと比較的長めに続くのも特徴**の1つです。

他の症状としては、**胸の痛み、喉の痛み、声のかすれ、下痢・嘔吐、皮疹**など

多岐にわたる症状を引き起こすことも知られています。

重症化した場合は細気管支炎を併発し、ゼイゼイとした苦しそうな呼吸となりますし、実際に息苦しくなります。

また、中耳炎、髄膜炎、肝炎、膵炎、関節炎などさまざまな合併症を引き起こすケースもあり、特に成人が発症すると小児よりも重症化しやすいとされています。

診断のためには、血液検査とX線検査を用いますが、マイコプラズマ肺炎は血液検査や画像検査のみで確定診断を行うことはできません。

もっともオーソドックスなのは鼻や喉から採取した粘液、痰を培養してマイコプラズマの有無を調べる方法です。



コロナウィルスやインフルエンザウィルスの様に、鼻や喉の粘液にマイコプラズマが含まれているか迅速に評価できる“診断キット”も広く用いられ

るようになっていきますので、これらを併用して検査を行い医師が確定診断をしていくわけです。

元々、若年層や子どもがかかる病気でしたが、お子さんから大人に感染してしまう、家庭内感染も注意が必要です。

予防は、通常の感染予防と同じです。手洗い、うがい、睡眠、休養、栄養、毎回ここにきてしまいましたが、いかにこの5項目が大事か？ということも実感できますよね？

① うがい



② 手洗い



③ 十分な休養と睡眠



④ 人込みを避る



⑤ 体を冷やさない



次回は
なんでしょう？
お楽しみに。

